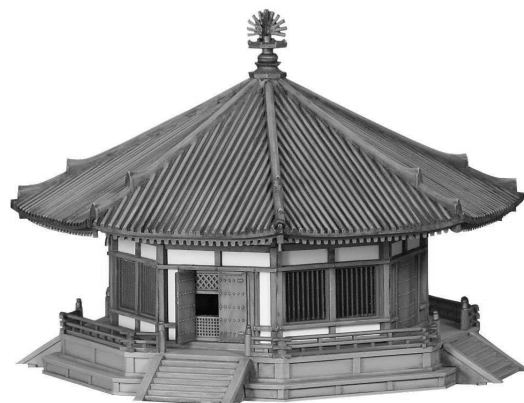
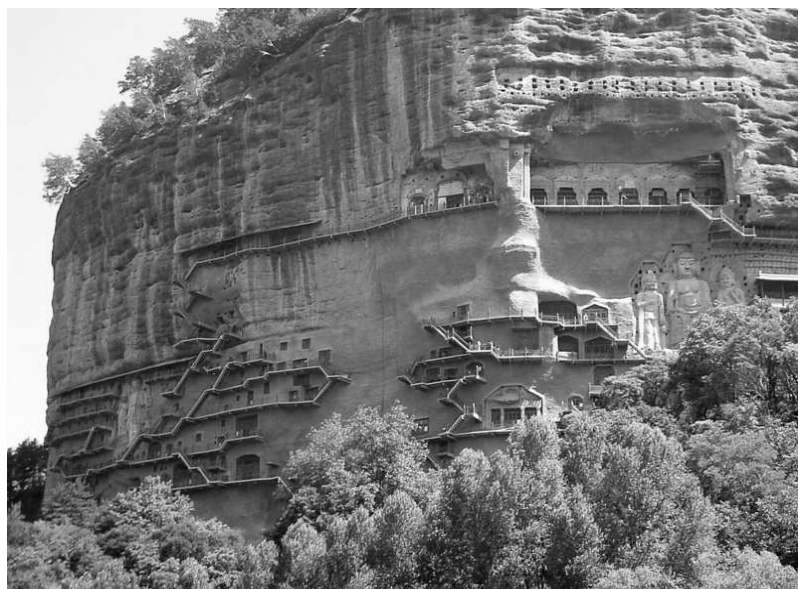


明治期にお雇い外国人として来日したフェノロサは、明治維新の神仏分離で起こった廃仏毀釈運動によって、自国文化を過剰に卑下する傾向にあった当時の人たちに、日本画や建築や芸術品についてその素晴らしさを具体的に評価し、講演したことで有名です。法隆寺夢殿には、秘仏とされ何百年も封印されてきた救世観音像がありました。フェノロサは岡倉天心と共に、政府の許可証を取り付けて、厨子に納められ幾重もの木綿に覆われていたその像を公開したのです。我々が毎年春と秋の特別開扉で夢殿本尊を観覧できるのは、彼らのおかげと言っていいのかも知れません。また、明治政府は彼らの意見を取り入れて文化財の自然科学的調査を開始し、専門の絵師による壁画の模写を行っていました。しかし、暖をとるための電気製品からと思われる出火によって焼損してしまいます。その日は気温3℃の寒い朝のことだったようです。暖をとる必要がありましたが、細心の注意に欠けていたのかもしれない。出火と言う最悪の事態に至らないように、二重、三重の管理が必要だったと思います。文化財は保護し、広く公開してこそ価値がありますが、焼損と言う劇的な被害を受けないまでも、環境変化によって変質や崩壊の危機に常に晒されると言うことを肝に銘じておく必要があると思います。

**法隆寺 夢殿 (模型)****法隆寺 中門 金剛力士像 (阿形)**

澤田先生は、壁画や塑像が作られてから1,300年も保存できた理由が「素材の異なる3層構造」にあることを説明されました。法隆寺五重塔の初重(1階部分)内陣西面の分舍利仏土に安置された乙女の像を例として、壁画の構造と照らし合わせての説明でした。乙女像のような小柄なものばかりでなく、中門で参拝者を頭上から見下ろしている阿形、吽形の金剛力士像も塑像です。陶磁器は高温で処理して焼結を伴う化学変化によって形を保持しますが、塑像は乾燥だけで熱を加えません。にもかかわらず何百年も保存されています。法隆寺の仏像には銅像や乾漆像などもあります。乾漆とは7月の工業先生のお話のときに出てきた夾紵とも呼ばれるもので、漆を塗りこんだ布を何枚も重ねて乾燥させたものを構造体としたものです。漆は古代でも非常に貴重な素材で、金にも匹敵するほどだったそうです。それに比べて塑像は安価に作れ重宝されたのかもしれない。

**麦積山石窟**

塑像を作る人たちの技術とそこまで完成度を高めた探究心を素晴らしいと思いましたが、それは遥か西方より伝えられた技術のようです。長い時をかけて、人類の進歩とともに発展してきたのでしょう。講師らが現地の人たちをお手伝いして、遥か未来の人たちにまで伝えようとしている世界の文化財です。現世に生きる我々は、後世の人たちの権利を奪うことなく、感動に浸りたいと思います。